

第1回 持続可能な観光指標に関する検討会 議事概要

開催日時：令和元年8月23日（金）15:00～17:00

開催場所：経済産業省別館 235 会議室

出席者：（委員）加藤座長

亀山委員、久保田委員、小林委員、鈴木委員、高山委員、
ハリス委員、廣川委員（代理：秋山氏）、福原委員（代理：西松氏）、
古屋委員 ※50音順

（国土交通省）高科観光庁国際観光部長、多田観光庁観光産業課長、小林観光庁
国際観光課長、奈良観光庁旅行振興担当参事官（代理：井上室長）、町田
観光庁国際関係担当参事官、田口観光庁外客受入担当参事官、富樫観光
庁観光地域振興課長、河田観光庁観光資源課長（代理：松浦係員）、藤
田総合政策局公共事業企画調整課事業総括調整官（代理：小長井アセッ
トマネジメント企画調整官）、蔵持総合政策局交通政策課長、川埜総合
政策局環境政策課長（代理：竹内企画官）
（オブザーバー）浦野氏

- 議題：（1）検討会の設置趣旨等について
（2）持続可能な観光指標について
（3）意見交換
（4）その他

意見概要

- ・日本版指標の普及方法であったり、活用ができるにはそれをきちんと使いこなせる人が必要になってくるので、人材育成は非常に重要になる。
- ・認証制度は、マーケティング力やブランド力という国際競争力を高めるためには、やはりそういうシステムが必要で、認証というシステムをうまく活用していくことが非常に重要であると思う。
- ・GSTCというものは、ある意味テンプレートというような、アンブレラになる非常に優れたものであるという理解をしている。そして、組織としても非常に中立性を保ち、また透明性であったり、利害関係の排除であったり、また客観的評価ができるシステムとして確立している点で、非常に優れている。
- ・認証制度あるいは指標の開発というのは、何のためにやるのかというのを、それを担う地域が理解して、共通認識を持てたところというのは、うまくいく可能性が高い。
- ・制度を作るということと、プロモーションするということ、あるいはその前段階として、地域の人がいかにそのことを、本当に自分が大事だと思って進めていく気持ちを持つかどうか。これがないと、制度というのはあくまで手段にすぎない。

制度作りは手段であるので、日本の観光地の質を上げるために取り組む、あるいはその地域の観光地、あるいは自分の町の観光地をどうするかというところをしっかりと持つことで、それを持ったところに、この制度がうまく合致すると非常に有効である。

- 指標の普及に際しては、非常に意識の高いところをまずモデルとしてやってみる。それで、その成果と反省を含めて整理して、他の地域に広めていく。最初からあまりに大きくしすぎると、地域特性もいろいろとあるので、うまくいかなくなる可能性が高い。
- 日本版指標は基本的には国際基準に準じながら、日本的なものをどうやって制度の中に評価対象として入れていくかを考えていく必要があると思う。「国際的な原理原則は守るけれど、日本的な特性への対応はこういうふうプラス評価をしています」、というように、制度のなかに最初から入れていく必要があると思う。
- 日本で今やりたいことは、G S T Cの基準に準拠した基準を作るという言い方で間違いないかなと思うが、その基準の中に日本独自の指標を入れたり、という作業になるのかなと理解している。その為、まずはG S T Cを理解することが大前提である。
- 日本版指標作りに際し、問題点が何かというのがあまりクリアになっていない。持続可能な観光の実現のために、今、何が問題であるのか、明確にした方が良く考える。環境や社会など、様々な評価主体があるが、「どのような評価主体にとって、どこにどういう問題があるので、こういう風にモニタリングをしなければならない。だからこの指標が必要だ」というロジックを明瞭にする必要がある。対策の立案につなげるようなきめ細やかな評価を行う必要があり、今一度、持続可能に対しての問題は一体何だろうかというのを明確にすることが重要。また、この指標は誰が利用するのかというのが、よく分からない。DMOなり地元の方々の利用に際して、本当に必要な精度や細かさ、本当に取りやすいのかということが明確でないと、持続可能な観光地づくりには十分ではないと感じる。
- 指標を作れば、自然発生的に使われるということではなく、誰がどのように使うのかあらかじめデザインしないと、作って終わりになってしまうと危惧する。従いまして、問題の所在を明確にするというのが1つ目。2つ目は誰がどう利用するのかということをしっかりデザインする、ということが重要。
- それぞれの地域で話し合っ、うちの地域ではどういう評価や指標をベースに作っていくか、みんなでそういう話し合いをするプロセスがすごく大事だと思う。
- 日本で持続可能な観光指標を開発された際にはできるだけ多くの自治体やDMO等に持続的に取り組んでもらって大きなムーブメントを作っていくことが重要で、指標に加えてガイドラインでデータソース等も解説するという事で、多くの団体が継続的に取り組みやすいような制度を設計して頂くことを期待している。
- 各自治体やDMOが今の観光地が置かれている実態を、自分自身で把握していくための

チェック項目を整理するというのが一義的な目標。それがさらに進んでいき、胸を張って世界に発信していける段階になれば、国際的認証を得ていただいて、PRにも使っていただけるということだと思うが、チェック項目を作るのであれば、最初から将来的な認証にも使えるものを視野に入れつつ作っておいた方が、手戻りがないのではないかとこの発想である。

ただ、すべての自治体がそれだけの費用を使って独自のものを作るかどうかというところもあるし、日本の1,700自治体がそれぞれ独自のものを作ってしまうと、まったく比較不可能なものになってしまうので、一つのテンプレートはお示しした方がいいのではないかと思う。

- 観光が地域にもたらしているミクロな意味でのメリットをしっかりと示していくことが、地域住民の理解を得ていくことにもなるし、コミュニティの満足度を測っているということ自体も、地域のご理解をいただけることにもなるのだと思っている。従ってこういったものを多角的に整理・分析し、ディスクローズすることが、意識的に自治体やDMOが住民も含めた地域のいろんな人たちのサポートを得ながら、しっかり観光行政に取り組んでいただくために、これだけ観光が大きなインパクトを与えるようになってきた段階では、必要不可欠ではないかというのが最初の問題意識だ。
まずはテンプレートとなるチェックリストを作って、今置かれている実態がどういうものか把握し、将来的には認証を目指すところまで行くという点の意識が大切である。
- 評価を継続してやっていくのにお金がかかる場合は、財政から「なんでこういうのが要るのですか」ということになるのだが、「それを上回る、こういうものがあるのです」ということになる、継続して取り組んでいきやすいのかなと思う。
- 住民の方に観光の効果やメリットを理解いただくのに非常に苦労しており、指標というのはマネジメントのツールだとは思っているのだが、こういうことを続けていく中で、住民の方の理解向上につながるものになればと期待する。
- テンプレートとして全国版を作り、その指標をさらに肉付けして、例えば「〇〇市版ならこういう評価をします」ということにしていくのが一番いいと思う。
- 自治体なりDMOが「持続可能な観光って何」とか、「持続可能な観光を自分たちでやっていくためには何を考えたらいいのか」ということがわからないというところが大半だと思うので、今回の基準とか指標を示して、「こういうことを考えていくと持続可能な観光ができ上がっていく道筋ができますよ」ということを示すのではないかと。観光地のDMOの人たちがこれを見て、自分たちが自己評価、あるいは自分たちが何を考えなければいけないのかということを考えていただくものにとすると。
今回受け入れやすい、わかりやすい指標を作ることによって、どういう点が観光地のマネジメントのポイントになるのかということDMOに知らしめて、試行的にいろんなマネジメントを地域でやれるように方向付けできれば良いと思う。自治体やDMOがこれから持続可能な観光をやっていくと言っても、観光地マネジメントで何をやっていいかわからないということで、そのポイントを示すことが第1段階。さらにそれを実際に

当てはめてもらって、自己分析をしていただくための自己分析ツールだと。今一体どこがまずいのかとか、どこがいいのか、そこをかつ経年で把握していくことによって、そろそろここはまずいぞというアーリーウォーニングシステムという意味で、早めに対策を打たないと取り返しのつかないことになるという意味での、自己分析ツールというのが第2段階である。

第3段階はそれを使って、住民とか旅行者とか、観光産業者とのコミュニケーションツールになると。観光産業者の態度を改めていただくためのコミュニケーションツールと。そこもやはり具体のデータやファクトがないと、感覚で議論しても結論が出ないというのが、今の意思形成の難しさだと思います。

最終的な第4段階ではすべていい形でできてくれば、プロモーションツールということで認証を受けていただいたり、ブロンズ・シルバー・ゴールドというところで第三者に評価をいただいて、それを積極的に発信していくのが良いと思う。

Q 各地域版にアレンジが進んだり、それこそグリーンデスティネーションズ(GD)が100の項目を作って、それに基づいて認証されているということだが、GDで認証受けている都市はどれくらいで、かつ費用はどれくらいなのか。

A GDの認証がされているところは、ヨーロッパでは1箇所しかない。(他、現時点ではアメリカに1箇所。)

Q ブロンズやシルバーなど、GDで評価を受けているところは何箇所くらいあるのか。

A ヨーロッパだと何百もあると思う。スロベニアという国だけでも、多分50~60あると思うが、ヨーロッパだけでなく派生してきて、アジアにも広がりつつある。観光によって町にどういうメリットがあるのかというところを、住民の人にもきちんと理解していただきたいと。こういった指標ができてきて、目指す町がどうなのかといったところで、少しでも改善ができればと思っているので、指標の設定に非常に期待をしている。指標を使った認証の話になるが、認証も一つの項目、例えば政策に関することだったりすると重要度は非常に高い。まずは基準と指標の話であって、この段階では認証の話は置いておく方がいいかなと思う。

○閉会

・第2回検討会は10月30日(水)を予定。

以上